

的思想傳統の體制から一旦自己疎外して、世界的な廣い視野から抽象客觀化された眼で事實の構成をはかる態度も研究史上同様に尊重して行かなければならない。われわれは劉氏の示唆多い本書の刊行を機會に王安石に關する事實研究がこれらの方向において充實醗酵し統一的理解への基礎が着實に積み上げられることを期待してやまない。

註

- (1) このシリーズは Harvard University の極東研究・研究者養成機關である The Center for East Asian Studies から刊行されている。既刊のアルバート・フォイヤワーカー氏著「中國の初期工業化」については、「東洋學報」(四二—二)に佐伯有一氏の書評がある。
- (2) 劉氏は同大學で Program on the Far Eastern Region の講座を擔當しておられるようである。
- (3) 劉氏の主要著述論文は左の如くである。

An early Sung reformer, Fan Chung-yen (Fairbank, J. K. (ed.), 'Chinese thought and institutions,' Chicago Univ. Press, 1957), Confucianism in Action (Wright, A. F. (ed.) Stanford Univ. Press, 1959), German Mediation in the Sino-Japanese War, 1937~88. (Far Eastern Quarterly 1949) 「梅堯臣碧雲觀與慶曆政爭中的土風」(「大陸雜誌」一七の二一、一九五八)、「范仲淹・梅堯臣與北宋政爭中的土風」(「東方學」一四、一九五七)。

- (4) Liu: Reform in Sung China, p. 87. では三司を戸部・轉運司・常平司の如く解し、Kracke, E. A. Jr.: Civil Service in Early Sung China 960~1067. の解釋を訂しているが、これはやはり Kracke 氏の主張の如く、戸部・鹽鐵・度支と解さなければならぬ。

- (5) 李觀の王安石に及した思想學術的影響については、胡適「記李觀的學說」(胡適文存二集)を挙げておく必要がある。また譚丕模「李王的政治哲學」(師大月刊一八)も参照。

- (6) 趙翼「二十二史劄記」卷二六・宋世風俗參照。

- (7) 「君子・小人」的朋黨解釋は、慶曆黨議における歐陽脩の朋黨論(歐陽文忠公集卷一七)以來、傳統的に一つの評價の型を形成し、近代でも、李家啓「王安石之政治思想」(中央大學半月刊)一〇〇・一九三〇)などにも見られる。

(財團法人東洋文庫研究生)

Ⅰ・チャンドラ氏「ウルガ版甘珠爾」について

Lokesh Chandra, A Newly Discovered Uriga Edition of the Tibetan Kanjur. —, Transcription of the Introductory Part of the Uriga Edition of the Tibetan Kanjur. (Indo-Iranian Journal, Vol. III~1959~Nr. 3, pp. 175~191, 192~203)

金子良太

ヒュー・デリーの The International Academy of Indian Culture には、ラグ・ビラ Ragu Vira の創案になるシャタピタカ Satapitaka とよばれるインド・アジア関係の文献の原典出版事業計畫がある。この資料蒐集のためラグ・ビラはウランバートル科學委員會の招待により、蒙古人民共和国におもむき廣範圍な文献調査を行った。最新刊のインド・イラン誌に L・チャンドラが紹介論文を寄稿した所謂「庫倫版甘珠爾」は、シャタピタカのために、一九五五年十二月に蒙古人民共和国首相ツェデンバル Tsendenbal からラグ・ビラに贈られ、現在インド文化國際學院に收藏されているものについてである。これによると、ウルガ版甘珠爾の内容分類及びその帙數は次の如くである。

庫倫版甘珠爾

律部	Vinaya	Ka-pa	一三帙
十萬頌般若部	Satasahasrikā	Ka-da, a	一一〃
二萬頌	Vinśatisahasrikā	Ka, kha, a	三〃
一萬八千頌	Asīḍasāsahasrikā	Ka-ga	三〃
一萬頌	Dāsāsahasrikā	ka	一〃
八千頌	Aṣṭasahasrikā	ka	一〃
雜般若部	Vividhaṅ prajñāpāramitāḅ	ka	一〃
華嚴部	Avataṃsaka	Ka-ga, a	四〃

L・チャンドラ「ウルガ版甘珠爾」について 金子

寶積部	Ratnakūṭī	Ka-cha	六〃
經部	Sūtra	Ka-a, an, ah, ki	三三〃
怛特羅部	Tantra	Ka-wa	一〇〃
古怛特羅部	Purātana Tantra	Ka-ga	三〃
陀羅尼集部	Dhāraṇī-saṅgraha	e, van	二〃
時輪經疏部	Vimalaprabhā	sri (重複)	二〃
目錄			一〃

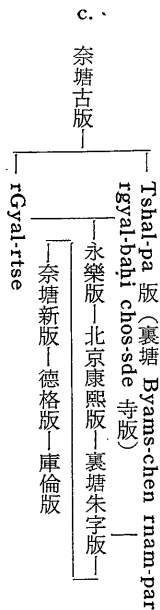
計一〇五帙⁽¹⁾である。印刷部分のサイズは 20×3 inches 一頁七行で既見諸版中最小のものである。

附屬目錄は七五葉。その最後部二葉には、葉番號の記載なく、更に葉番號一〇が上・下 bcu-goṅ dan bcu-hog と重複しているため、目錄の葉數 Sog-grans は七二を數えるのみである。このうち序文は初葉よりで一〇葉・下・裏五行までである。最後部二葉には帙數の記載があり、ラグ・ビラ所藏本と完全に一致する。

序文は四項目からなり、第一項目では諸版甘珠爾の成立史を略説し、各版間の系統をも記述している。今これを圖表に整理する。

諸版系統圖

- a. hPhan-thaṅ-ma 目錄
 b. lDan-dkar-ma 目錄 (以上寫本、bの目錄のみは版本がある)



となる。第二項目は授記經證に終始する外蒙佛教史の極く簡單なものである。第三項目では庫倫版開雕の次第が詳述されており、事業の規模が或る程度明らかにされている。

發願主は最後のシェプツンタンパとなつた第八代 Nag-dban blo-bzani chos-kyi ni-ma bstan-hdzin dhan-phyug dpal-bzani-po 自身で、光緒三十四年(一九〇八年)に銀一〇〇〇 Stran を基金として投じ、主管者に Padma rDorje を任命して開雕事業を發足せしめた。この大業には外蒙僧俗の多大な喜捨があつめられ、主なものは悉く目錄序文に記名されている。今、序文の記録によつて各旗のジャサク・タイシ・貴族喇嘛および駐在アンバンなど要人達四九名の寄進を合算しただけでも、八六〇二銀 Stran の高額に達している。その他 No 單位の銀寄進者、版木および紙などの現物寄進者なども記名されている。又業務分擔に關しては、mKhan-po No-mon-han 主管のもとで、シェプツンタンパ親選の學僧數百名が参加し、德格版を底本として校訂を完成した。印刷擔當官には blo-bzani dpal-ldan 等七人が記名されてい

る。記名版木反字淨書擔當者は rNam-sras 等五三名、同彫刻擔當者は Sri-thar 等一一五名におよぶ。加え、開雕關係の宿營についての記録まであつて、目錄序文に明記された基金だけでも二萬余銀 Stran なのであるから、實際に開版事業に費された物的資源はこの數倍に及ぶ規模であつたと想像されるのである。かくして庫倫版甘珠爾は宣統二年に完成された。目錄序文の最後第四項目においては、律部經典數點の排列順序の問題について、從來の傳承に對する庫倫版編輯者の見解が述べられている。即ち、古く Bu-ston 目錄におつては、

- (1) Bhikṣu-prātimokṣa
- (2) Vibhāṅga
- (3) Bhikṣuṇī-prātimokṣa
- (4) Vibhāṅga
- (5) Vinayavastu
- (6) Kṣudraka
- (7) Uṭtaragrantha

と排列されている諸經が Goṇ-dkar-pa の場合には、(1)(3)(5)(4)(7)(6)の順におかれ、庫倫版は古 hPhan-tham-ma 目錄に準據する Tshal-pa 甘珠爾を踏襲して、(5)(1)(3)(4)(7)の順に收録している點である。

以上が序文概要であるが、L・チャンドラの紹介論文の特徴は、この「附屬目錄序文」の全英譯とその補註にあり、且つその原文のローマ字轉寫を附して、對照の便宜をはかつているところにみられる。

從來、近代學者の編輯に成る目錄の傾向は、諸版の附屬目錄の序文即ち開版緣起の傳承がもつ史料の價值に注目しているものが少なく、諸版の勘校目錄のみに主點がおかれてきたことは、笠松單傳「チベット大藏經について」（佛教研究・第五卷三・四號）などの書誌的研究をみても明らかで、わずかに河口慧海師譯「西藏大藏經甘珠爾目錄」（謄寫版刷一九二八年）と題する奈塘版甘珠爾附屬目錄の邦譯に原序の抄譯が載せられているにすぎない。本格的に諸版の附屬目錄・序文、又は跋記を史料として、諸版の成立年代を推定したと思われるものには、酒井紫朗「喇嘛敎の典籍」（一九四四年）第三章藏内佛典があるのみである。

一八三六年にチョーマが「奈塘版分類目錄」⁽⁹⁾を學界におくつて以降、一八四五年のベテルスブルグの「甘珠爾目錄」⁽¹⁰⁾、一九一四年にはベック編輯ベルリン王室圖書館所藏「寫本甘珠爾目錄」⁽¹¹⁾、一九三二年には大谷大學所藏「北京康熙版甘珠爾勘同目錄」等々と相次いで各種目錄が發表されてきたが、今回の庫倫版序文の譯註の如き研究方法はみられなかつたといつ

てよい。

酒井氏は前掲書において、永樂版「御製序讚」、萬曆版「御製勅諭」、同續藏「附屬目錄」、康熙版「御製番經序」、交呢版「丹珠爾附屬目錄」、庫倫版「附屬目錄」、奈塘新版「附屬目錄」、乾隆修補版「甘珠爾秘密部 Cha 帙跋記」等々を史料として、番藏成立史考を試みられたが、開版年代の推定にとどまつたようである。

一方、L・チャンドラ氏の紹介論文の所説には、酒井氏の一連の勞作である前掲書及び「華北五臺山所藏佛教文獻調查概況」（密敎研究第七十六號・一九四一年）、「華北五臺山の大藏經」（前同・第八十七號・一九四四年）などを參考しなかつたために、數點の誤説をたてているにしても、原序文の補註に關しては、

G. N. Roerich, *The Blue Annals*, Part 1, 1949.
G. Tucci, *Tibetan Painted Scrolls*, Part 2, 1949.
——, *Tibetan Notes*, HJAS, Vol. 12, 1949. L. Petech,
A Study on the Chronicles of Ladakh, 1939.

等、最新の基本的研究書をよく利用して精讀を期しているといつてよい。

就中、番藏目錄における重要な特殊用語である *phyi-mo* の解釋については、ソッチの“*Supplementary texts*”と

解することに對し、ロイリックの“Original texts”とする見解の方を数種のケースに照らし正しむるものがある。立證した點などはみるべきところである。phyi-maの第二形である、phyi-moは各版目録にみられるが、ケースにより「原典」・「底本」・「精要」と譯すべきで、河口師前掲目録では「外編」と譯され、ツッチも「補編」と理解してゐるが、“original or essential texts”の意味で、經典成立史の資料を扱う場合、phyi-mo, 及びの phyi-mo-hi-phyi-mo は注意すべき語である。

最後に、チャンドラ氏が、Rinchenの所説として、一九三七年同版丹珠爾が校了となり、若干帙が開雕出版されたと明らかたしてゐることを附記して置く。

註

- (1) 酒井氏は密教研究第七六號・第八七號において、山西省五台山黃廟鎮海寺並びに普壽寺所藏庫倫版甘珠爾の調査成果を發表してゐるが、同氏は時輪經疏部帙番號、Stの重複を一帙とし、目錄部とあて計一〇四帙と記してゐる。
- (2) 銀衡單位は、10 sKa-rma=1 Zo. 10; 20=1 Srañ, 50 Srañ=1 rTa-rmig, 1 rTa-rmig は一馬蹄大銀塊をいふ。
- (3) Alexander Csoma Körösi; Analysis of the Dulva, a portion of the Tibetan work entitled the Kah-gyur.

—Analysis of the Sher-chin, P'hal-ch'hen, Dkon-séks, Do-dé, Nyang-dás, and Gyur; being the 2nd, 3rd, 4th, 5th, 6th, and 7th divisions of the Tibetan work, entitled the Kah-gyur.——Abstract of the contents of the Bstan-hgyur. Asiatic Researches, Vol. 20, 1836, 1839, pp. 41~63, 363~552, 553~585.

(4) Bkah-hgyur-gyi dkar-chag oder der Index des Kan-djur. Herausgegeben von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften und bevorwortet von I. J. Schmidt, St. Petersburg, 1845.

(5) H. Beckh, Verzeichnis der tibetischen Handschriften der Königlichen Bibliothek zu Berlin. Erste Abteilung: Kanjur (Bkah-hgyur). Berlin, 1914.

(國立國會圖書館文部東洋文庫員)

J・ダンカン・M・デレット

「ホイサラ家——中世インダ王家」

辛 島 昇

J. Duncan M. Derrett, M. A. (Oxrd), Ph. D. (Lond.): The Hoyalas, A Mediaeval Indian Royal Family. Madras, Oxford University Press, 1957.